

参加型福祉の交通まちづくりに向けた市民ワークショップ活動*

- 大阪市北区におけるケーススタディ -

Citizens Workshop Activity toward Transportation and Town Managements by Partnership with Neighborhood: A Case Study in Osaka City Kita Ward

石塚 裕子**・飯田 克弘***

by Yuko ISHIZUKA**, Katsuhiko IIDA***

1. はじめに

平成 12 年 11 月に交通バリアフリー法が施行されて以来、全国の自治体において基本構想の策定が着実に進んでいる。今後は、基本構想に基づいたまちのバリアフリー化の推進が期待されるが、その過程で、特に交通バリアフリーから福祉の交通まちづくりとして発展するためには、重点的に取り組むべき課題が二つあると考える。

一つは、放置自転車問題をはじめとする市民のマナーや、看板・商品のはみ出し等商店街との関係などに代表されるまちづくりに対する市民意識に関わる課題である。二つ目は、基本構想策定後、どう市民の関わりを維持し継続的な参加を図るか、さらには行政主導から市民主導への転換の課題である。

これらの課題解決には、行政、市民、事業者など多様な関係者の理解と協力が不可欠であり、施設整備と並行して、いわゆる心のバリアフリーという意識啓発への取り組みが必要となる。しかし、その必要性や取り組みの意向は、多くの基本構想において示されているものの¹⁾、具体的な対策を実行している事例は少なく、解決が難しいのが現状である。

そこで本稿では、この課題解決をねらいとして大阪市北区で実施された「北区バリアフリー市民ワークショップ」(以下、北区 WS と示す。)の活動実績を報告する。そして参加者の意識の変化を各人の発言、行動を通じて整理し、北区 WS の意義を考察した。

2. 取り組みの背景と目的

大阪市では平成 14 年度から交通バリアフリー法に

基づいた基本構想の策定に取り組んでおり、平成 17 年 3 月末時点で、21 地区、55 駅で基本構想が策定され、北区においては 2 地区、9 駅で基本構想が策定済みである。しかし、いずれの地区においても先に挙げた課題が残されており、継続的な取り組みの中でその解決を図ることが必要となっている。

そのような中、北区 WS は、以下に示す 3 つの目的を掲げ活動を行った。

バリアフリーについて多くの市民が「知る・学ぶ」、「体験する」、「理解する」、「協力する」場をつくる。

市民が主体となってバリアフリーのまちづくりを進める方法を検討する。

地域を中心に多世代でまちづくりについて考える場を提供する。(小学校の総合学習との連携)

3. 取り組みの概要

(1) 対象地域

北区 WS は大阪市北区菅北地域を対象としている。菅北地域は大阪市北区の東部に位置し、JR 大阪環状線天満駅、大阪市営地下鉄天神橋六丁目駅がある。南北方向に天神橋筋商店街が地域を縦断し、住商が混在する地域である。

(2) 取り組みのポイントと期待する効果

北区 WS では図-1 に示す 3 つの工夫を試みた。

1 点目は交通バリアフリー基本構想の策定に参加経験のある地域住民、障害当事者、学識経験者による「バリアフリーアドバイザーズ」を組織し、その他の参加者を先導することで、活発な議論の展開と市民が主体となった提案が行われることを期待した。

2 点目は地域コミュニティの単位である小学校区を基本に表-1 に示す参加者構成とし、多様な市民の参加を確保するとともに、コミュニティの活用を試みた。

3 点目は「福祉」に関する総合学習に取り組みされて

*キーワード：住民参加、交通バリアフリー法、コミュニティ

**正会員、八千代エンジニアリング株式会社大阪支店技術 2 部
〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70

TEL(06)6945-9215 FAX(06)6945-9303

***正会員、博士(工)、大阪大学大学院工学研究科

いる地元小学校（菅北小学校）と連携を図り、多世代での意見交換を行うことで、互いの意見に刺激を受けて発想の転換が行われるなどの効果を期待した。

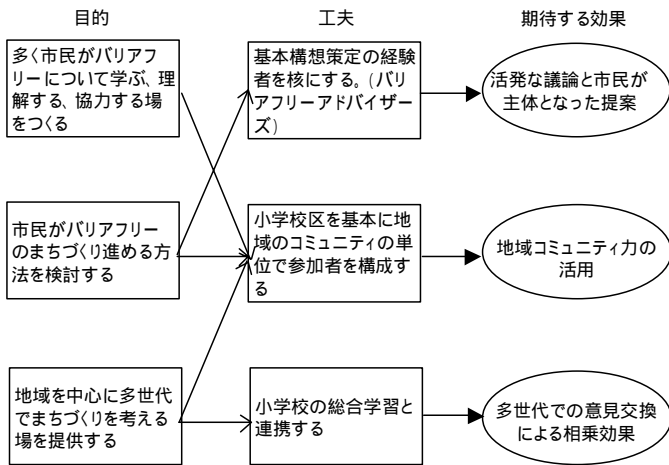


図-1 取り組みの工夫と期待する効果

表-1 参加者の構成

	人数	
学識経験者	1	
基本構想策定経験者	(内障害当事者)	3
	(その他)	4
障害当事者	1	
アドバイザーズ(小計)	9	
商店会関係者	4	
小学校PTA	6	
地域社会福祉協議会	6	
総計	25	

(3) 取り組み内容

北区 WS は表-2 に示すとおり合計 5 回開催し、第 2 回と第 4 回は小学校の総合学習授業と合同で行った。

表-2 取り組み内容

	取り組み内容	開催場所
第 1 回	バリアフリーについて考える講習会 ・学識経験者による講演 ・グループディスカッション(まちの問題点抽出)	北区民センター会議室
第 2 回	菅北まち歩きワークショップ(小学校と合同開催) ・まち歩き(道路、商店街、駅、主要な公共施設) ・まちの「やさしいところ」「やさしくないところ」マップの作成	菅北小学校講堂
第 3 回	市民が取り組むバリアフリーについて考えるワークショップ ・商店街での取り組み紹介 ・グループディスカッション(私たちに出来ること、まちづくりへの提案)	北区役所会議室
第 4 回	菅北やさしいまちづくり宣言づくり(小学校と合同開催) ・私たちに出来ること、まちづくりの提案の宣言	菅北小学校講堂
第 5 回	今後の展開に向けて考えるワークショップ ・本年度の取り組みのまとめ ・継続的な取り組みに向けての課題整理	北区役所会議室

第 1 回、第 3 回、第 5 回はグループディスカッション等を中心に意見交換を行い、学識経験者による講演や商店会での取り組みなどを紹介する場を設けている。

第 2 回は菅北小学校 5 年生の生徒 49 名と一緒にま

ち歩き、マップの作成を行っている。まち歩きでは、道路や商店街、鉄道駅の他、子供たちの希望を踏まえて区役所等の公共建築物の点検を行った。障害種別等による 6 つのグループごとに、障害当事者の同行、疑似体験などを行うことで、それぞれに視点からまちのやさしいところ、やさしくないところを発見している。マップを作成した結果、道路、商店街についての意見の約 40% が放置自転車の問題を指摘しており、この地域の大きな課題であることが改めて確認された(図-2)。

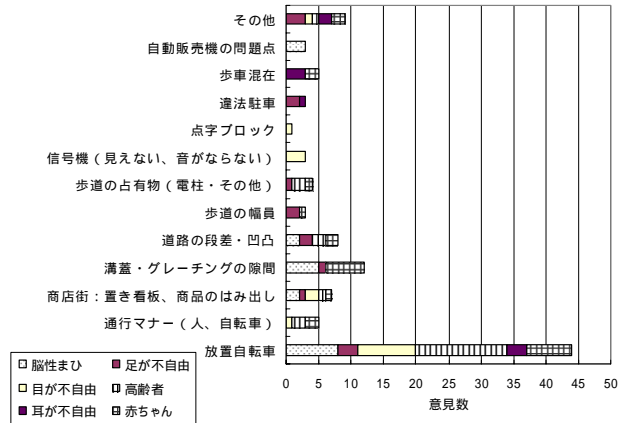


図-2 まち歩きマップの意見 (やさしくないところ:道路・商店街編)

第 4 回は北区 WS で取りまとめた意見と菅北小学校 5 年生の生徒が取りまとめた意見を互いに発表し、意見交換して、大人と子供が協働して「まちづくりへの提案」と「わたしたちに出来ること」をとりまとめた。

子供たちからは、「困っている人へのお手伝い」と「自らできることをまちで実行する」提案が多数を占めているが、目や耳が不自由な人をテーマとしているグループからは「コミュニケーションの方法(手話など)」を習得するという意見もあった(図-3)。

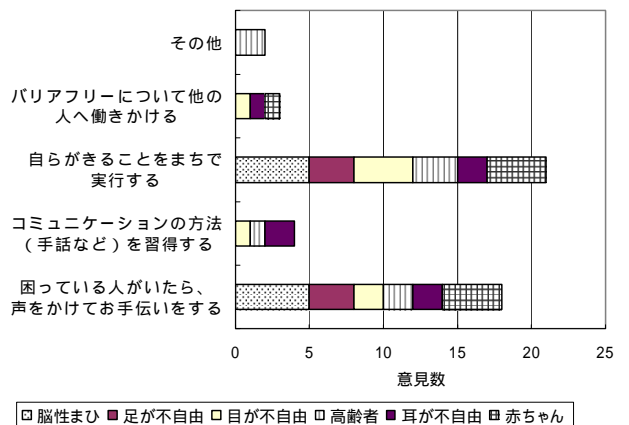


図-3 わたしたちが出来ること(子供)

「まちで実行する」の内容の約 60% は放置自転車に

関することとなっている(図-4).大人からは放置自転車,自転車の通行マナーに関して多数の提案が行われた.

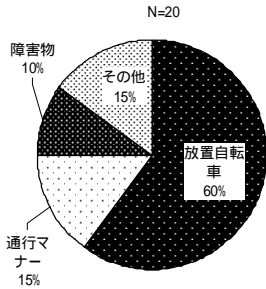


図-4 まちで実行すること

4. 考察

(1) 視点

前述の期待する効果で、「市民が主体となった提案」, 「多世代の意見交換による相乗効果」について, 参加者の発言や行動に現れた意識の変化から考察する。「コミュニティ力の活用」については, 今後の継続的な取り組みの中でその効果が期待されるため, 本稿では考察していない.

(2) 市民が主体となった提案

市民が主体となった提案が行われたか, 検証するためにアンケートや議事録を基に, 発言レベルを表-3に示す3段階に分類し, 参加者の意見を整理している.

表-3 発言のタイプとレベル

代表的な課題		発言のレベル		
		低 ← 主体性 → 高		
		~してほしい	~したい	~する
ハード	駐輪場の整備 施設のバリアフリー化等	1	2	3
ソフト	自転車の通行マナー 商品・看板のはみ出し等	1	2	3

この分類に基づき, 北区 WS 参加者の意見構成の経時変化をみたところ, 第1回ではハード, ソフトの両面の課題に対して行政等に対する要望的な意見が大半を占めていたが, ワークショップを重ねるごとに, ハードからソフトへ, 要望から主体的な意見へと変化していることが確認できる(図-5).

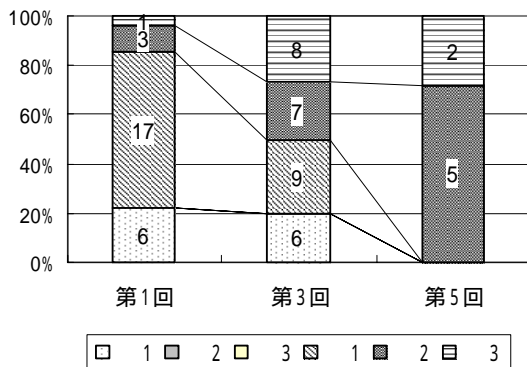


図-5 意見分類の変化

また, 意見の大半を占めた「放置自転車対策」, 「自転車の通行マナー」について代表的な意見を整理すると図-6のようになり, 要望的な意見から具体的な解決策へと議論が深まっていることが確認できる.

最終ワークショップでは, 継続的な取り組みや実行に移していきたいとの意見が多数あり, 自転車問題に対する5つのプロジェクトがまとまり, 市民主体の活動へと発展する可能性を示していると言える(表-4).

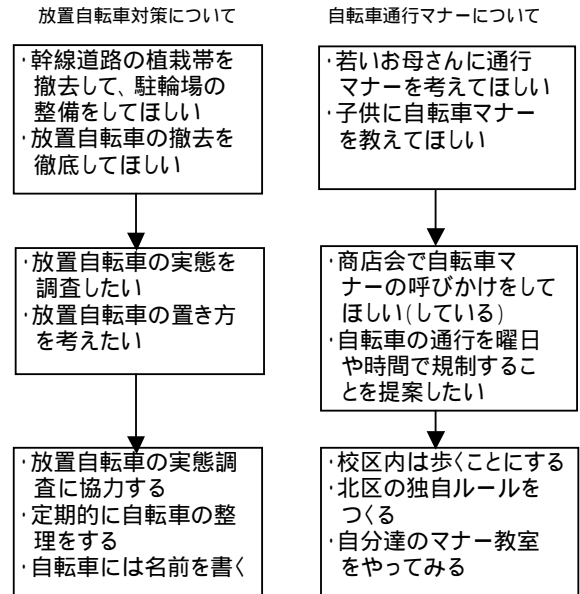


図-6 代表的な意見の変化

表-4 市民が考える自転車問題プロジェクト

バリアフリーの視点で自転車利用最適化プロジェクト 取り組み組織の結成 放置自転車の実態調査の実施 自転車利用規制の社会実験の検討 自転車利用マナー向上キャンペーンの実施 小規模駐輪場事例調査の実施

(3) 多世代の意見交換による相乗効果

菅北小学校の総合学習と連携した2回の合同ワークショップにより大人と子供のそれぞれの効果について, いくつかの意見から整理する.

子供への効果

第2回のまち歩きワークショップ後, 子供たちにアンケートを実施した結果, 多くの子供たちが, 地域の人たちと一緒に歩いて, 「いろいろ教えてもらった。」 「地域のことをよく知っていた。」などと回答している.

また, 第4回ワークショップでは, グループディスカッションの場で, 大人の提案を聞いた後, 子供達が

ら新たな提案が生まれている。地域の大人たちと直接会話することで、自分達が気付かなかった地域の情報を得ることができ、また、自分達では思いつかなかったことを聞いて、新たな考えが加わるなどの効果が現れている（表-5）。

表-5 大人と提案と子供の意見

大人の提案	その提案に対する子供の意見・提案
自転車利用者にアンケート調査をしよう	アンケート調査をすることで、みんなが自転車について考えてくれるようにしたい
マナー向上のチラシ配布を手伝う	心のバリアフリーを呼びかけるポスターを作って貼る

大人への効果

アンケート結果の報告など間接的に子供たちの意見を伝えていた段階では効果があまり確認できなかったが、第4回ワークショップにおいて直接、子供たちの意見に触れることで、大人たちの意識変化があったと考えられる。

第4回の後に実施したヒアリングでは、「子供たちの意見には感心した」、「子供たちに学ばなければならぬと感じた」などの意見が多数出されている。このことが影響し、図-5に示しているように、第5回ワークショップでは自らが行動する意思や継続的に取り組むことなど、市民の主体的で発展的な意見が多数を占めるようになってきているとも考えられる。

(4) 総括

以上の結果から、今回の取り組みは市民主導の福祉の交通まちづくりを推進するために素地づくりとしての効果はあったといえる。その要因については十分に確認できていないが、多様な市民の参加、複数回の協議の場、小学校との総合学習との連携など、それぞれが効果的に機能したと考える。

6. おわりに

最後に、ここで得られた経験を基に、交通バリアフリーから福祉の交通まちづくりへと発展させる取り組みについて、留意すべき点を以下に列挙する。

経験の積み重ねの必要性

今回の取り組みでは、基本構想策定への参加経験がある人々の効果は明確に分析できていないが、早い段階で本研究が指摘する課題に議論が移行したことは、経験者によって、駅のバリアフリー整備などの施設整備に関する情報提供などの効果があったと考えられる。

また、市民の主体的な行動へと転換するには、多様

な意見交換と時間を要することが改めて確認されており、市民の経験の積み重ねが必要といえる。

多世代での意見交換の必要性

北区WSでは、子供、子育て世代、高齢者と幅広い年代による意見交換が実現し、その効果が確認されたと考える。基本構想策定委員会等では地域住民の代表等のみが参加するケースも少なくなく、年齢構成も偏る傾向にある。本研究が指摘する課題の解決や交通バリアフリー推進がまちづくりとしての定着していくためには、多様な世代の理解と協力が不可欠である。また、ある意味で参加慣れした者だけの議論では意見の幅が限定されることもあるため、この点からも世代の異なった視点の意見を聞き、互いに刺激しあうことで、取り組みを発展させることが必要であると考えられる。

市民組織等の連携の場づくり

今回の取り組みでは、障害者その他の市民、商業事業者と市民、小学校PTAと商業事業者など、市民と市民、市民組織同士の接点が少なく、まちの問題点の共有や様々な取り組みへの協力体制が整っていないことが明らかになっている。このため、北区WSのような組織の価値について、多くの参加者が評価している。

今後は、市民と行政の協働の場だけでなく、市民が主体となった市民組織の連携の場づくりが必要である。

コミュニティカの活用

上述した多世代の意見交換、市民組織等の連携を図っていくには、コミュニティのまとまりに留意した取り組みが必要である。また、今回のような活動を通じて、地域を再発見し、地域への愛着をもち、地域コミュニティの再生へと発展する可能性がある。その結果はまだ確認できていないが、地域コミュニティカの再生そのものが、市民主導の福祉の交通まちづくりであるといえるのではないかと考える。

最後になりましたが、我々に協力の機会を与えていただいた大阪市北区役所をはじめ、協力いただいた市民の方々、菅北小学校に深く感謝します。

参考文献

- 1) 児玉健・小西弘朗・石塚裕子・九後順子・本久仁美：複数事例比較による交通バリアフリー基本構想の特徴と今後の課題、日本福祉のまちづくり学会第7回全国大会講演集